

「良い韓国人も悪い韓国人も殺されていいのか！」 ヘイトスピーチ・クライムの根絶を！

オ
呉

クァン ヒョン
光 現

まさか「人権の世紀」といわれる日本で「人種抹殺」表現が大手をふるうとは微塵も思わなかった。かつて在日韓国・朝鮮人は公営住宅に入れず、公務員・教員はおろか民間企業にも就職できず、14歳になれば強制的に指紋を権力に採られ、拒否すると逮捕・再入国拒否と非人道的な扱いを受けてきた。子どもの頃は本名(民族名)を名乗ることなどは想像すらできなかった。「日本に住まわせてもらっている」と思っている僕たちが自らの権利を主張できるわけがなかったのだ。まさにこれが私の、そして私たちの歴史である。そして一つずつ多くの人と一緒に差別を撤廃させてきた。これは私の財産である。

「冬のソナタ」をはじめとする韓流コンテンツが流行すると、嫌韓という言葉も生まれた。「マンガ 嫌韓流」はベストセラーにもなった。ここには少女マンガの大きな瞳の愛らしい「良い日本人」と「あくどい」ことをおこなって無理難題を押しつける醜い姿の「悪い(在日)韓国人」がいる。一貫しているのは日本の歴史はすべて正しく、植民地支配、戦争責任、在日の権利云々はすべて根拠のない嘘だということだ。そこで提示されたのが「在日特権」である。彼らが言う4大特権は①特別永住資格②生活保護の不正受給③通名(日本名)④朝鮮学校補助金である。ここでは字数の都合上結論だけ述べるが、すべて根拠のない言いがかりである。これらはすべて戦後日本がこれらのことの責任を果たしてこなかったことに起因する。巷には嫌韓本があふれるようになった。

そして人種排外主義団体「在日特権を許さない市民の会(在特会)」が2007年に結成された。ネット空間でヘイト発言をしていた彼らは、2009年春に埼玉で退去強制の危機にあったフィリピン人の家族の強制送還を求める人種排外デモをおこなった。その子どもが通う中学校をコースにして、その名前を連呼しながら街の中を練り歩いたのである。これに味をしめ、同年12月には京都の朝鮮学校を襲撃し、まさに授業中の子どもたちに向かって「スパイの子ども」「密入国の子孫」「日本から出て行け」と好き放題をした。学校の要請で出動した警察は彼らを制止せずにするがままに任せた。警察は「寛容的共犯者」であったのだ。このために子ども、教師、保護者は今も癒えることのない大きな傷を負った。これが日本の学校であったなら即座に全員逮捕連行は間違いのない。

まさにヘイトスピーチであるこの発言、行動は、日本

が批准している人種差別撤廃条約に明らかに反している。ドイツなど欧州ではこれは「刑事犯罪」である。しかしこの日本では「表現の自由」という名の下、人種排外発言が野放しである。私たちはこの日本の状況を問わざるを得ない。

その後、在特会の行動はエスカレートしていく。東京都新宿区新大久保にあるコリアタウンでは毎週ヘイトデモがされ、北海道から九州まで拡がっている。去年は約360回に至った。まさに「毎日どこかで」の状況である。

私の住む大阪市生野区鶴橋では、昨年2月24日に中学生が「鶴橋大虐殺しますよ」と拡声器で叫んだ。そこにいた私は体の震えが止まらなかった。しかもその映像を彼らは誇らしげにネットの動画サイトに投稿しているのである。

しかし多くの人が立ち上がり、昨年10月に、京都朝鮮学校襲撃事件で日本の裁判所史上初めて「人種差別」と認定し、有罪判決が下された。この良心の一步を拡げたい。そして日本はすべての人種、民族が生き活きと暮らしていける社会にならねばならない。

今年の日本聖公会第61(定期)総会で「ヘイトクライム(人種・民族憎悪犯罪)、ヘイトスピーチ(人種差別・排外表現)の根絶と真の多民族・多文化共生社会の創造を求める日本聖公会の立場」を採択する件が上程される。これを契機に日本聖公会や他教派の教会でも「もうヘイトクライムはやめよう。一緒に生きていこう」の声が大きくなり、行動していくことを願ってやまない。

(聖公会生野センター総主事)

